



目 次

ごあいさつ	2
平成11年度42回通常総会報告	3
第19回「母校を訪ねる会」を開催	4~8
同窓会、クラス会、その他	8~10
支部活動報告	11~13
日本大学校友会工科系連絡会:工科系支部長会開催	13
校友レポート	14
若葉マーク	15
校友会事務局の「事務所開き」開催	16
校友会誌によせて	17
校友短信	18
Campus	19
平成12年度通常総会・第20回母校を訪ねる会	20



50周年記念館 ハットNE

ごあいさつ



日本大学工学部長
小野沢 元久

西暦2000年という記念すべき年を迎える校友会の益々の発展を祈念すると共に、平素の温かいご支援に対し心より感謝いたします。

工学部も開設以来半世紀を経過し、教育・研究の拠点として地域社会の評価も高まり、いよいよ成熟期に入つてまいりました。校友の方々の絶大なるご支援を受け、50周年記念館(ハットNE)が完成し、新たなる学部のシンボルとして、教育・研究はもとより学生の憩いの場として好評を得ております。

工学部50周年の価値は、単に、その歴史の古さばかりではなく、その課程で培った大学の理念と蓄積した経験を土台にして、将来に向けて発展をはかり、広く社会に貢献することにあると、私どもは信じています。4万人を超える校友の後方支援は、私どもの心の支えであり、大学を発展へ導く大きな原動力にもなっています。

21世紀初頭における大学を取り巻く社会状況は、現状から更に大きく転換することが予想されます。より国際競争力の強化が求められる中で、我が国では少子・高齢化が進行し生産年齢人口が大幅に減少すると同時に、産業構造や雇用形態にも大きな変化が予想されます。

高等教育においても国立大学の独立行政法人化の問題や技術者教育認定制度(JABEE)の導入、日本の大学はかつて経験したことのない激動期を迎えつつあります。

工学部も21世紀に向けて「生き残り」、「将来の繁栄」を手に入れるための喫緊なる課題に着手しなければなりません。校友会のお力をかりて推進しなければならない課題も沢山あります。例えば、就職支援サービスの一環としてのインターンシップや产学連携による技術移転(HLO)の推進は校友会組織のネットワークに期待するところが大であります。

40年の歴史を有する本学部校友会は、他の学部に無い組織力と結束力を備えていると、私どもは高く評価いたします。

今後とも新しい時代を見据えて、新たな事業を開拓し、益々発展することを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



校友会会长
佐藤 光正

校友会会員の皆様におかれましては、希望と新進の気銳に満ちて、新しい年をお迎えになられたことと存じます。

私は平成11年度の通常総会の議によって、会長の要職を勤めることになりました。もとより非力な輩でありますので、皆様には、忌憚のないご叱正とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、新世紀の幕開けを目前に控え、鎮座して聞くべきは、新しい時代の息吹であり、足音であります。人々の社会規範を決定づける「価値観」は、急激に変化しかつ分岐して、世代間を繋ぐ共通の言葉すら覚束ないのが現状であります。この状況を、逸早く、正確に分析し把握して適切なる対処をすべきものと思います。此處に教育界が果すべき役割が存在するであります。

母校工学部は、平成7年をもって、創設50周年を迎えた。この間4万余名の卒業生を輩出し、その社会的評価については、他に誇るべきものは満々あるのですが、これは、過去に対する評価であって、この成果に溺れてはいけないと私は思います。「日に日に新たに」と校歌が示唆するように昨日は隠れた力としては極めて貴重であるが、今日は全く別の一日として、創り上げてゆかねばならないものと思います。

昨年4月、任期を満了された、前工学部長蓬田和夫先生の後任として、現工学部長小野沢元久先生が就任されました。小野沢先生は工学部第13回の卒業生であります、卒後直ちに母校に奉職され、今日に至って居られるのですが、その見識と実行力には、歴代の学部長諸先生方と同様、先導者たるの資質に満ち溢れ、転換期の教育界をリードできる、得難い人物のお一人であると信じています。校友会も、新しい道を闊歩する工学部に、遅れることなく、自らの新しい道程を見出し時局に距わぬ「校友会活動」を展開しなければならないと思っております。皆様のご提言、ご教示を心よりお待ち申し上げております。末筆となりましたが、母校創設50周年記念事業に対し、多くの校友の方々からご芳志を賜り、かつ校友会創立40周年記念行事へのご参加を戴き、誠にありがとうございました。ここに、衷心より感謝申し上げるものであります。

平成11年度第42回通常総会報告

平成11年4月17日(土)午後1時より、第42回通常総会が日本大学郡山研修会館において開催された。総会は佐藤幹事長の開会の辞にはじまり、木村会長の挨拶と続いた。次いで、議長に小山田克己氏(土3回卒)、議事録署名人に半沢忠氏(工化6回卒)及び小野信太郎氏(土29回卒)、書記に野尻大五郎氏(工化16回卒)及び渡辺信一氏(土21回卒)が選出され議事に入った。報告第1号・平成10年度会務報告が村田事業担当から、承認第1号及び第2号の会計収支決算について伊藤経理担当からあり、これに対する会計監査報告が鈴木守会計監査よりあった。続いて議案第1号・平成11年度事業計画並びに第2号、第3号の平成11年度一般会計収支予算及び特別会計収支予算が提案され、いずれも承認された。次いで、議案第4号・役員改選のための役員選考委員会が別室で開かれ、新役員の選考が行われた。この間、総会は休憩に入ったが、佐藤満夫役員選考委員会委員長(建6回卒)より選考結果の発表で再会され、佐藤光正氏(機9回卒)を会長とする21名の新役員案について審議の結果、平成11年度から3年間の新役員として承認された。これにより総会は、加藤木副会長の閉会の辞をもって終了した。

総会終了後、恒例の懇親会が同所に於いて本部から山澤新吾常務理事、小野沢工学部長ほか多数の来賓を迎えて、盛会裡に開催された。



平成10年度一般会計収支決算書

平成10年度一般会計収支決算書						単位：円 △…減
歳入	種目	予算額	決算額	比較増減	付記	
会費	1 終身会費	10,300,000	10,220,000	△ 80,000		
	2 入会金	10,300,000	11,350,000	1,050,000		
	計	20,600,000	21,570,000	970,000		
歳越金	3 前年度繰越金	4,440,140	4,440,140	0		
	計	4,440,140	4,440,140	0		
繰入金	4 通常財産より繰入金	900,000	900,000	0		
	計	900,000	900,000	0		
	5 預金利息子	100,000	81,585	△ 18,415		
雜入	6 名簿代金	0	20,000	20,000		
	7 雜取入	9,860	290,000	280,140		
	計	109,860	391,585	281,725		
	合計	26,050,000	27,301,725	1,251,725	104.8%	

歳出						単位：円	
歳出	種目	予算額	流用増減	予算現額	決算額	残額	付記
事務費	1 給料手当	4,800,000	15,906	4,815,906	4,815,906	0	
	2 旅費	350,000	23,186	373,186	373,186	0	
	3 交通費	750,000	0	750,000	732,000	18,000	
	4 諸費	20,000	0	29,000	4,240	15,760	
	5 国際費	700,000	39,000	739,000	739,000	0	
	6 食費	250,000	0	250,000	177,397	72,603	
	7 備品費	190,000	0	190,000	0	190,000	
	8 印刷費	300,000	0	300,000	96,075	233,925	
	9 郵便運搬費	500,000	0	500,000	352,786	147,240	
	10 修繕維持費	10,000	0	10,000	1,701	8,299	
	11 高熱水費	30,000	0	30,000	30,000	0	
	12 分担金	500,000	0	500,000	500,000	0	
	13 雑費	130,000	0	130,000	40,550	89,450	
	計	8,530,000	78,092	8,608,092	7,862,815	745,277	92.2%
事業費	14 総編対策費	1,290,000	△ 64,860	1,135,140	1,135,140	0	
	15 会報発行費	5,300,000	2,103,312	7,403,312	7,403,312	0	
	16 会員管理費	2,800,000	△ 517,143	2,282,857	2,282,857	0	
	17 名簿作成費	0	0	0	0	0	
	18 下宿対策費	10,000	23,722	33,722	33,722	0	
	19 図書購入費	300,000	0	300,000	300,000	0	
	20 式典費	2,400,000	△ 1,058,850	1,391,150	1,391,150	10,000	
	21 母校訪問費	410,000	△ 41,516	368,484	368,484	0	
	22 貧困補助援助費	550,000	0	550,000	550,000	0	
	23 50周年記念寄付	0	0	0	0	0	
	24 40周年記念事業費	500,000	△ 581,801	113,199	113,199	0	
	計	13,470,000	112,864	13,582,864	13,572,864	10,000	100.8%
	25 総会費	900,000	0	900,000	701,880	198,120	
会議費	26 役員会費	400,000	0	400,000	244,231	155,769	
	27 連絡協議会費	350,000	0	350,000	168,220	181,780	
	28 旅費	1,400,000	0	1,400,000	1,192,460	207,540	
	計	3,050,000	0	3,050,000	2,306,791	743,209	75.6%
繰出金	29 会員総会賛助金	0	0	0	0	0	
	30 会員総会賛助金	300,000	0	300,000	196,560	103,440	
	計	300,000	0	300,000	196,560	103,440	
積立費	31 積立金	0	0	0	0	0	
	計	0	0	0	0	0	
予備費	32 予算費	700,000	△ 190,956	509,044	0	509,044	
	計	700,000	△ 190,956	509,044	0	509,044	
	合計	26,050,000	0	26,050,000	23,939,030	2,110,970	91.9%

歳入額 27,301,725円

歳出額 23,939,030円

差引残額 3,362,695円を翌年度へ繰り越しとする。

財産の状況(平成11年3月31日現在)

財産の状況(平成11年3月31日現在)						単位：円
一般会計	引当財産	運用財産	合計			
3,362,695	5,162,665	16,100,000	24,625,360			

平成10年度職員退職給与積立金特別会計収支決算書

平成10年度職員退職給与積立金特別会計収支決算書						単位：円 △…減
歳入	種目	予算額	決算額	比較増減	付記	
歳越金	1 前年度繰越金	4,874,097	4,874,097	0		
	計	4,874,097	4,874,097	0		
繰入金	2 一般会計より繰入金	300,000	196,560	84,240		
	(職員負担金繰入)	300,000	196,560	84,240		
	計	300,000	280,800	△ 19,200		
雑入	3 雜取入	5,903	7,768	1,865		
	計	5,903	7,768	1,865		
	合計	5,180,000	5,162,665	△ 17,335		

歳出						単位：円	
歳出	種目	予算額	流用増減	予算現額	決算額	残額	付記
引当金	1 職員退職引当金	5,180,000	0	5,180,000	0	5,180,000	
	計	5,180,000	0	5,180,000	0	5,180,000	
	合計	5,180,000	0	5,180,000	0	5,180,000	

歳入額 5,162,665円

歳出額 0円

差引残額 5,162,665円を翌年度へ繰り越しとする。

「母校を訪ねる会」第19回目を開催

校友会が大学と一線を画して付かず離れずの関係では、母校の発展に必ずしも好ましい状況ではなく、他大学の例にも見られるように、母校と共に校友会活動を充実してこそ実効ある結果が得られると考えられます。

その主旨を前提として工学部と共に開催で行われる「母校を訪ねる会」は、校友会結成以来、半分の年月を捧げて営んできた活動であり、本会の主要な事業の一つとなりました。

第19回「母校を訪ねる会」は、北桜祭中の平成11年10月24日(日)、工学部創立50周年記念館(愛称:ハットNE)で開催されました。当初、招待者は卒業後20年目に当たる校友が対象でしたが、その後、40年目さらに30年目に当たる方々からも期せずして要望が挙がり、今回のような大規模な“会”となりました。出席された校

友は総員137名で、小野沢学部長の“世界的視野での現状認識”、“母校存続のための理念と思索”などを含めたご挨拶に、出席者は深い感銘を受けると同時に、母校の現実を直視する機会を与えられ、極めて意義深いものがありました。

今回のような3卒代に亘る「母校を訪ねる会」の開催は、当初、校友会創立40周年記念事業の一つとして計画されたのですが、卒業生諸氏を母校へ招聘し、その労をねぎらい、同時に学部現状の情報を提供することによって、より一層活力ある社会活動の一助にされたいと願うことから、今後も今回の形態で続けていきたいと考えております。

平成12年度秋には第20回の開催が予定されております。開催の折には、さらに多くの方々のご来校をお待ち申し上げております。



昭和33年度卒業生(第7回)・昭和43年度卒業生(第17回)



昭和53年度卒業生（第27回）

懐かしの「母校を訪ねる会」

梅澤尋昌

平成11年夏の暑さも和らぎ、柔らかい秋風が吹き始めた頃我が建築学科クラス幹事から「参志会」開催の案内状が届いた。

参志会は、昭和34年3月建築卒業のクラス会名である。この案内状と前後して工学部校友会長から「母校を訪ねる会」への招待状が手元に届いた。

卒業以来はや40年、クラスの方々が最初の勤めを定年退職し、第2の職場やフリーの生活をしているだろうなあ…と思いつついすれにも参加の申し込みをした。

参志会は、10月22日磐梯熱海のホテル四季彩一力を会場に6名と奥様同伴2組10名が参加し、仕事の思い出、健康面、子供の事等思い々に夜遅くまで歓談に花が咲いた。

一日おいて24日は風も無く晴天に恵まれ、参加者全員に教授をまじえて記念写真を撮った後、今年新築された「50周年記念館」を会場に小野沢工学部長、佐藤校友会長始め各学科の先生方列席のもと高松事務局長の



乾杯で賑やかにパーティーが開かれたが、我々クラスからの参加者が小栗君と私の2名丈と少なく他より寂しいのが残念であった。

終わりに、卒業40年目に母校を訪ねる機会を企画された各位の方々に感謝し、母校の益々の発展を願いつつ報告を致します。
(建築7回卒)

◇建築7回卒　岡　一幸(大林組(株)、千葉市)

母校を訪ねる会のご案内を頂き、ありがとうございました。是非参加したく、スケジュールを調整しましたが、欠席となりました。機会を見て訪問したいと考えております。

「40年目の母校」

佐藤寿哉

8月末のある日、母校の校友会事務局から、昭和33年度卒業の私共が、卒業40年目の節目の年に当たり、「母校を訪ねる会」に招待されるとう有り難い電話を頂戴しました。また、前日には毎年同級会を開催しているとのお話をしたので、その世話役を引き受けた次第です。

卒業後40年という長い歳月と、さらに年金生活に入っている(私自身もそうですが)同級生も多いことから、何人参加してもらえるか不安でしたが、幸い12名の参加を得られ宴会も大いに盛り上がり夜遅くまで語り明かしました。

「母校を訪ねる会」の当日、車に分乗し全く変わってしまった開成山の風景を横目で見ながら母校に向かいました。

正門の前に車を止め、立派に変わった建物を目の前にし、ただただ呆然と見とれた次第です。入学した時、「自分の高校よりお粗末だ」という印象を持った記憶を思い出し、現在のあまりの変貌に驚きました。立ち並ぶ校舎、太く生い茂る木の幹の太さが40年という長い歳月を実感として感じさせてくれました。

学内をあっちにうろうろ、こっちにうろうろ、どこかに我々が学んだ当時の名残はないかと探し回りましたが見つかりませんでした。



懇親会では、学部長さんが少子化時代に対応した大学の在り方に苦慮されているお話を伺い、現在、官界並びに民間会社に押し寄せている再編成の大きなうねりが、いずれは教育界にも押し寄せるのかなと言う感じがいたしました。

とはいっても、日本は技術立国を国是としており、技術者の需要性は21世紀においても不变です。どうか21世紀に向かって母校の更なる発展を期待しエールを送る次第です。

最後になりましたが、この度の「母校を訪ねる会」にご招待下さいました大学当局並びに校友会に厚く御礼申し上げます。

(電気7回卒)

「20年振りに母校を訪ねて」

柏森宇一郎

平成11年10月23日、快晴、新潟から車で国道49号線を通じて母校に向かった。会津若松、猪苗代湖、磐梯熱海と近づくにつれて、20年前の思い出が少しづつ蘇り、宿に着いた時には22歳の学生に戻ったようであった。

同日の6時から郡山ビューホテルにおいて、19名の同級生と石井和樹先生の参加を得て同級会が行われた。先生からは大学や先生方の近況について教えていただき、その後お互いの近況を報告しあった。残念ながら私が当時親しくしていた、学生番号の近い人や同じ卒研の人は参加していなかったが、酔う程に心が和み、楽しいひとときを過ごすことができた。



翌日は「母校を訪ねる会」に参加した。20年振りに訪れたキャンパスには、立派な建物が立ち並び、母校の発展に大いに感激した。それにしても、不思議に思ったのは、キャンパス内に作業服を着た学生が一人もいなかつたことである。当時、土木工学科の学生にとって作業服は、フォーマルウェアであり、学内はもとより駅前の繁華街でも、どこにでも着ていたものである。これも20年という時の流れによるものか、といえば、石井先生の話では、土木工学科でも毎年10名程の女子学生が入学しているとのこと、少しうらやましい。

懇親会の後、「母校を訪ねる会」を開催していただいた学部と校友会ならびに竹花君を始めとする同級会の幹事の方々に心から感謝し、次回の「母校を訪ねる会」を楽しみにして郡山を離れた。

(土木27回卒) 旭調査設計株式会社

◇土木27回卒 下記の2名は多忙のため「母校を訪ねる会」に参加できなく残念がっていました。皆様によろしくお伝え下さい。 氏家孝治(丸七氏家建設(株)夕張市)

齋藤信彌(三井不動産建設(株)茨城市)

「二十年ぶりの再会」

柏原 広 繼

今までの二十年間を振り返えり、喜び・悲しみ・怒り・出会い・別れといろいろと公私共に忙しい歳月であった者同士が、母校の地である郡山に、北は北海道、南は鳥取から、遙々集い、大半の者は、卒業以来であったが多少は老いが目につくものの、学生の時の顔が、そこには有り、それぞれ責任ある地位について、活躍しており、自身に満ちあふれた顔を目の当たりにし、一献かたむける心地よさは、卒業後、苦労してきた報いの一つで有った様に思われ、一晩の祝宴の喜びだけにするだけでなく、今後の二十五・三十年目の同窓会に、また出席し、今回と同じ様な感動を、享受できる様に、日々精進していこうという前向きな気持ちにさせられたのは、この会に出席した皆の正直な想いであったと思う。



今回、同窓会の幹事を、私を含めた地元の七名で、案内状を作成し、送付させていただき出席の連絡をいただき、不慣れで不手際な同窓会でしたが、出席していただいた皆さんの笑顔に助けられ、無事同窓会を、お開きに出来た事を、この紙面をお借りして、御礼を申し上げたいと思います。有り難うございました。 (建築27回卒)



「母校を訪ねる会」懇親会風景

「母校を訪ねる会に出席して」

竹内 洋 司

8月頃から今年の秋は私たち27回卒業生の集まりがあるなど楽しみにしておりました。そのうちにクラス会、母校を訪ねる会の出席を確認する手紙が届いて幹事さんの名前を見て驚きました。同じ卒研や同好会の仲間でありこれはどうしても顔を出さなくてはと思いました。クラス会には15名の参加でしたが、自己紹介をしている間に昔の面影がよみがえってきました。また、佐藤光正校友会長にもご参加いただき色々と大学の話もお伺いしました。その日は親友の熊田君宅にお世話になりました。翌日は、50周年記念館のすばらしい建物の中で懇親会がとり行われました。私と小田島君は、小川明先生に案内されて



流体の研究室を見学させていただきました。学生さんが何人かおり実験されていました。当時は人海戦術で手作業が主力でしたが、パソコンを導入し解析しており格段の進歩に感嘆させられました。壁には夏季合宿で行った青森での写真が掲げてありたいへんつかしく思いました。最後に小野沢学部長が、お話をなられた21世紀に向かってこれから日本大学の進む道が洋々たる事をお祈りし、準備をなされた方々に御礼申し上げます。

(機械27回卒)



「母校を訪ねる会」懇親会風景

「母校を訪ねる会」に出席して 渡邊 博之

平成11年度の母校を訪ねる会は第27回卒業生が対象となり、校友会からの勧めもあってこれを機会に卒業以来はじめての同級会を10月23日夜に郡山ピューホテルアネックスで開催する計画を西田先生らと共に10名の発起人で行いました。インターネットでの呼びかけや友達同志の誘いもあって同級生34名と恩師10名の総勢44名の出席者で大盛会に終了しました。20年ぶりの再会になつかしい顔を見ると、まるで青春時代にタイムスリップした感じでした。また、子供が工学部に入学している同級生もいて、母校で過ごしたあの時間を大切なものとして子供に伝えている気がしました。2次会ではホテルの門限に遅れて裏口から入ったグループもありました。翌日の母校を訪ねる会では、新しい建物の移り変わりを見たり、将来の工学部構想などの説明を受け

たりして当時からは想像できない変貌ぶりに驚嘆した様子でした。



この会のお陰で、消息のわからなかつた何名かと連絡がとれました。校友会関係者のご苦労に対して御礼申し上げると共に、遠路ご多忙の折、発起人の申すところをお聞き下さいました皆様に感謝致します。またの再会を祈願し、皆様の益々の健康とより一層のご活躍をお祈り致します。
(電気27回卒)日本大学工学部勤務

同窓会・クラブ・その他

土木4回卒同期会 (平成10年秋の叙勲に久高将榮氏) 青木 孝松

学部開設50周年の慶事を記念し、平成9年11月7・8日の両日に私共(土木4回卒・昭和31年3月)は、級友全員に呼びかけて41年ぶりに同期会を開催しました(校友会報第61号に掲載)。次いで2年後の今年10月2・3日の両日、全国から級友11名が参集して磐梯熱海温泉「金蘭荘花山」にて2回目の同期会を開催し再会の感激に浸ることができました。

懇親の宴は、元気で再会できたことの喜びと恩師、学生生活など懐かしい往時の思い出を心行くまで語り合い、深夜に至る楽しい一夜を過ごすことができました。

今回は、特に沖縄出身の久高将榮氏(沖縄県元土木建築部長)が、平成10年秋の叙勲で地方自治功労者として「勲四等瑞宝章」を授賞されたお祝いを兼ねて行いました。久高氏が学生時代を過ごした当時は、本土復帰前(沖縄はアメリカの占領下に置かれていた)のこと、内地留学生に選抜され、4年間北心寮で生活し学業に専念されました。受章は、長い間県の要職にあって、土木行政に対する貢献と社会資本の整備に果した功績が高

く評価されたもので、栄えある受章式にはご夫人と出席され、皇居で天皇陛下に拝謁をされたと聞きました。終生の喜びと共に感激で一杯であろうと思います。級友の第1号の受章者であり誠に嬉しく誇りに思います。これからも一層の活躍を願って止みません。

さて、今度もまた安藤、桑名、郡司の幹事役には大変お世話になりました。21世紀を迎える2年後は、在京の諸氏を幹事役に準備をお願いすることに致しております。お互いに元気で参加できることをお待ちしております。

終りに私共が同期会を開催することが出来たのは、平成8年10月の「母校を訪ねる会」と言う素晴らしい企画に



よる招待をいただいたことに因るものです。改めて校友会並びに学校関係者のご高配に衷心より感謝を申し上げます。母校のますますのご発展と校友皆様のご多幸を祈念いたします。

(土木4回卒)

唯今(平成11年) 東京都23区役所に 土木部長3人在職中!

早川一胤

「二工会」(第二工学部、土木工学科14回卒)の会員から、ついに、東京都23区役所のうち、3人の土木系部長が誕生しましたので報告させていただきます。

平成11年4月1日付けで、新宿区役所の荒木君が満を持して環境土木部長に就任し、これで、目黒区役所の入江土木部長、渋谷区役所の田村土木部長と3人の土木系部長の揃い踏みとなりました。これは、同期の桜として、大きな快挙と感ずる所であります。



早速、祝い会を開くべく準備をしましたが最高位の部長職となると、それぞれ多忙でなかなか日程調整がつかず、遅れること4ヶ月、平成11年7月31日(土)、東京都福利厚生事業団の大原会館で盛大に祝い会を行いました。当日は、突然に決まった日にもかかわらず、東京を中心に関東地区の同期が総勢15名(荒木繁、入江巧、田村俊昭、遠藤茂勝、古賀興一、吉永洋司、杉原文秀、高木誠司、土橋誠一、西川望、福井清、西海俊雄、桃溪謙次郎、渡辺洋二、早川一胤)が集まりました。三人の土木部長を囲んで皆で共に祝い大いに気勢を上げた次第です。これからも何かにつけて、祝いの同期会を行ない、「オイ」「オマエ」と呼べる30数年前の言葉で話し合えること、これは若き青春を思い出し、ただの郷愁でなく、これから活力にして行きたいと考えます。

これからも「二工会」は張り切りたいと思います。

(追伸…東京区役所土木部長会の会長に入江君、副会

長に荒木君、分科会の部長に田村君がそれぞれ就任しています。)

(土木14回卒) 東京都、水道局勤務

燃研(柳沼研) OBG会に参加して

桜井辰男

第2回燃研(柳沼研) OBG会が北桜祭に合わせて10月23、24の両日に開催され、楽しく参加することができました。

1日目(23日)は朝早くから郡山近郊のゴルフ場で、柳沼先生ご夫妻も出席されてのゴルフコンペでしたが、トリプルボギーは良い方で、ダブルスコアをたたく方もいて、1日中ゴルフ場は笑い声が響いておりました。

夕方から郡山のホテルで表彰式、OBG会総会、懇親会を行いました。総会と懇親会には80名を超える卒業生が参加されて、先輩も後輩も柳沼研の大家族のような雰囲気の中で楽しいひとときを過ごしました。この懇親会には柳沼先生の御家族全員も出席され、現役の卒研生による司会進行で進められました。先生が大切に保管されていた卒業生の写真を、年次毎にスライドで上映し、自己紹介をする形式で進められ、遠い青春時代を思い出しながら、当時の仲間と共に楽しく話に花を咲かせました。学生時代にはほとんどの卒業生が先生のお宅にお邪魔してお世話になりましたから、奥様はじめ大きくなられた子供さんと共に再会を喜び合い、深夜まで酒を酌み交わしました。



2日目(24日)は北桜祭となつかしい匂いと実験器具など想い出がギッシリ詰まった研究室を訪れて、感激を新たにいたしました。

次のOBG会は、2002年に開催されますが、先生はじめ卒業生の皆様と再びお会いすることを楽しみにしております。

最後に本会の開催にご尽力を下さいました、会長はじめ事務局と現役の卒研生に深く感謝申し上げます。

(工化24回卒) 助川電気工業(株)

少林寺拳法部第8代同窓会

坂 田 千 武

工学部体育会少林寺拳法部第8代幹部同窓会を静岡県の熱海後楽園ホテルにて、平成11年6月26日に開催しました。

今回で3回目の開催となりますが、遠くは札幌、大阪、京都より、32名中19名が出席し、20年前にタイムスリップした様な時間を過ごしました。

第1回は、卒業後10年目という事で、平成元年に郡山セミナーハウスで久保田孝君が幹事で開催し、第2回は平成5年に鬼怒川温泉で山城平二郎君の幹事で、開催しました。平成10年に第3回を予定しましたが、卒業20年目で母校を訪ねる会と同年になり、便乗してはという話もありましたが、それぞれの事情もあり今回の開催となりました。都合により出席できなかった仲間の近況報告もあり、皆、元気で各方面で活躍している事を確認しました。



次回は、平成15年愛知県で小島秀三君、大堀完弘君の幹事で開催される予定です。

全員の参加を楽しみにしています。又、今回芹沢秀治君の協力により無事開催できた事を感謝します。

最後に、母校の益々の発展と校友の皆様の御健勝、御活躍を心から祈念いたします。 (土木25回卒)

柔道部創部50周年を迎えて

日本大学工学部柔道部 部長
倉 田 光 春

平成11年10月23日、郡山ビューホテルにおいて、小野沢学部長、高松事務局長のご臨席を賜り、総勢約70名の出席者のもと盛大に創部記念祝賀会が執り行われましたことをご報告申し上げますとともに、創部当初から50年の半世紀に渡りご指導ご鞭撻賜りました校友並び

に大学関係者の皆様に衷心より御礼申し上げます。

顧みますなれば、設備も整わず稽古場所の確保もままならない学部草創の昭和24年頃から、数人の学生有志が集まり活動を開始したと伺っております。創部当時のご苦労には並々ならぬものがあったことと思います。

その努力が実を結び、現在では約300人のOBを輩出し、それぞれ各界の第一線で活躍されていることは後輩の精神的な支えになっております。



私自身も当柔道部に籍を置き、学園紛争で揺れる大学で柔道に精進していたことが今では懐かしくさえ思えます。

最後に、諸先輩の築き上げたすばらしい伝統を受け継ぎ、来るべき21世紀に向けて、更なる柔道部の発展に精進いたしますので、今後とも校友並びに大学関係者の皆様におかれましては、ご指導のほどお願い申し上げます。

(建築17回卒)

校友会創設40周年記念 「総合名簿」発売中

- 内 容 約39,000名の名簿
約700ページ
- 領布金額 6,000円 (郵送料とも)
- 申込方法 校友会事務局にお申込み下さい。

尚、会員皆様の住所、勤務先・役職等の変更は、校友会事務局までお寄せ下さい。

支部活動

北海道支部活動報告

北海道支部長 岡本繁美

21世紀の橋渡しとなる今年、校友の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

昨年は校友会の40周年記念事業のひとつとして素晴らしい会員名簿が発刊されました。校友会本部ならびに実行委員会の皆様のご努力に深く敬意を表したいと存じます。



さて当北海道支部は昭和49年に結成され、現在の支部会員数は1,000名を超える状況となっております。郡山の学舎に育った校友は道内各地の様々な分野で活躍され、同窓のひとりと致しまして、非常に心強く、そして誇らしく感じている次第です。

当支部では年1回の総会ならびに懇親会の開催と、校友間の相互交流を支援することを目的とした支部会員名簿の発行を主な活動としております。来年早々には新しい名簿を発行する予定となっており、地域の先輩諸兄の協力をいただき、できる限り新しい情報を集約したものにしたいと考えております。

北海道はとても広く、校友が集うこともなかなか難しい環境にはありますが、支部の活動を通じて校友の絆を強めるお手伝いができればと考えております。

(土木16回卒)岡本興業株式会社

東海支部活動報告

東海支部長 川村智健

1900年代最後の年の東海支部の活動は、第38回ゴルフコンペを5月19日(水)、富士カントリー明智ゴルフ俱楽部ひるかわゴルフ場において、出席者16名が楽しみながら、曇り空の下で腕を競うことから始まりました。

8月4日(水)に、恒例の父母懇親会にあわせ、第27回東海支部総会をホテルキャッスルプラザで開催しま

した。平野支部長の挨拶に続き、工学部校友会の手塚公敏副会長から、校友会の近況報告も合わせたご挨拶を頂きました。続いて一年間の活動報告があつた後、役員改選を原案通り承認して総会を終え、日本大学校歌が流れる懇親会会場にとコマを進めていきました。

父母懇親会に出向かれた母校の先生方をお招きし、恒例に従い乾杯の音頭で開宴となりました。総勢約70名ほどがお互いに酒を酌み交わし、酔いが回るにつれて先輩後輩が入り乱れ、先生方の話を興味深く聴く者、若き日々を過ごしたみちのくの地に思いを巡らして母校や郡山を懐かしがったりする者等々のいくつもの輪ができ、時間の経つのを忘れて和やかな一時が過ぎてゆきました。最後に応援団OBの音頭で校歌と応援歌を大合唱し、参加者一同存分に旧交を温め、青春の感動を胸に次回での再会を約束し、名残惜しみながら散会しました。



10月26日(水)に第39回ゴルフコンペを前回のひるかわゴルフ場で13名が参加して行われた(小生のデビュー戦に最適な晴れ日よりだったのに残念無念?……)。

西暦2000年まで残すところ1ヶ月を切った12月8日偶然にも58年前の太平洋戦争追悼を重ね合わせたのを別にして、東海支部今年最後のイベント忘年会に31名が参加して盛況に行なわれ、近況報告、情報交換と楽しい一時を過ごしました。

以上の公式的な活動の他に、折に触れいろいろ理由をつけて先輩後輩が集まり、飲む、語るの機会を設けて親睦を深めています。

東海支部に在籍または在住する校友の皆さん、お互いに気軽に誘い合い、そして、気軽に参加してくだされば幸いに存じます。

(土木15回卒)

四国支部活動報告

四国支部長 北岡 保之

総会は、8月7日に恒例通り高松市内のわたや旅館で開催し、3県より8回卒から34回卒までの23名の参加がありました。事業・会計報告があり、役員の再任が承認され、各県単位の活動状況、支部活動の活性化など話し合い、総会を終えました。

懇親会は土屋(土19)の司会で始まり、お忙しい中出席頂いた校友会の佐藤会長より50周年記念事業の状況等報告いただき、谷久(土8)先輩の乾杯の音頭で開宴となりました。酔が回るなか、恒例の近況報告、情報交換と盛り上がり、最後に吉田(土17)応援団のリードのもと寮歌、校歌の大合唱で旧交を大いに温めました。

支部の会員数は約500名で、エンジニアとして広い分野で活躍しています。希望者には会員名簿を送付していますのでお気軽に申し出て下さい。



総会以外の活動状況は次のとおりです。

①月例会(一木会)を第1木曜日に六車(土16)氏のお世話で高松市内町6-5「はんぶん」で18:30~20:30に自由参加で行なっております。転勤族の方等一度来て下さい。また6月5日には三木(建42)新婚夫妻をまじえて家族会(21名参加)にまで発展しました。

②6月20日坂出C.C.にて3組12名のゴルフコンペを好天のもと行い、平山(土24)氏が優勝しました。年に2回の予定で希望者だけに連絡することになっています。

(工化14回卒)高松市下水道部長

九州支部活動報告

九州支部長 湯村 筑後

本年度は第19回九州支部総会を平成11年10月1日、福岡市天神平和楼にて開催しました。参加者は例年と同じぐらいでしたが、ご多忙の中、佐藤校友会長自ら九州までお運び頂き本当に有り難うございました。志のうえと

ても懐かしい“うすかわまんじゅう”まで頂き支部長をはじめ全員大喜びでした。

総会は、支部長挨拶から始まり、会計報告、1年の経過報告と続き無事終了しました。引き続き懇親会に入り、湯村九州支部長、佐藤校友会長の挨拶の後、九州支部では、恒例の最年少者(H11年4月卒)による乾杯の音頭で宴会が始まりました。約2時間の懇親の中では、いつもの事ながら懐かしい郡山の思い出に花が咲き、下宿やアパート、同級生、先輩、後輩、先生やクラブの事など、いろんな話がとびかっておりました。佐藤会長からも今の工学部の敷地建物の変わり方や、学生や先生の変わり方、学校の回りや、郡山市内の変わり方など皆興味深く懐かしそうに耳を傾けていました。

総会の締めくくりは大変です。校歌齊唱、万歳三唱、その後九州でも博多でも山笠で行う博多一本締めと、博多祝い目出多と乱れながら集合写真を撮り、大成功で1次会終了、2次会の中洲へと移動しました。その後の皆さんの行動は……。

九州支部の1年の動きですが、九州支部(アカシヤ会)と称し、毎月第三木曜日に総会と同じ天神平和楼において、18:30~20:30、3,000円の会費で、酒を酌み交わし、5~10人のメンバーですが、案内がなくてもその日来れる人、集まる人のみが集まって仕事の話や、遊びの話など、情報交換を行いコミュニケーションを取り合っています。本当に気楽に集まってわいわいやっています。

今年は、とても厳しい年だったと思います。当支部においても、大変な企業がいっぱいあったのではないかと思います。また、こういう時期だったのであまり派手な催しは避けておりました。しかし、あまりつらい話ばかりではつまらないで、来たる2000年には九州支部も第20回という節目の年になりますので、幕開けの1月には今年から習い始めの湯村支部長も含めて、初打ちゴルフコンペで不況を吹っ飛ばし、第20回支部総会を盛大に行いたいと考えております。

九州支部も沖縄まで8県ありますが、各県で行う事も出来ず、今では福岡以外の県は総会にも出席出来ず、会費も入らないので案内状や名簿の整理も及ばず、工学部福岡県支部みたいになっているのが現状です。ともあれ、転勤が多い方がいっぱいいらっしゃいますが、九州から

出たり、九州に入ったりする際は必ず九州支部の事務局脇山まで、御一報頂く様お願い致します。（建築10回卒）



日本大学校友会工科系連絡会：工科系支部長会開催

平成11年10月23日(土)、日本大学校友会工科系連絡会および工科系支部長会を開催校友会である工学部校友会の企画のもと、工学部校内の54号館において、午前11時30分から開催された。会は、開催校友会会长・佐藤光正、生産工学部校友会会长・賀畠豊、薬学部校友会会长・原田貞亮、工科校友会会长・原田長治の挨拶より開会した。

参加総数42名で工科校友会13名、生産工学部校友会9名、薬学部校友会5名、工学部校友会15名の各会長、副会長、常任幹事が参加し、下記3件の協議事項について忌憚なく討議がなされた。

- 1) 支部問題等検討会の名称変更
- 2) 中退者の学部校友会入会取扱いについて
- 3) 支部長会の話題について各校友会の実情報告

また、各事務局の取扱や経費の管理運用は、四学部各々特質があり統一見解は得られなかつたが、積極的な意見交換がなされ、有意義に討議が行なわれた。

引き続き13時から工科系連絡会メンバーと工科系支部長または支部長代理の総参加者数63名で合同の支部長会会議を実施した。まず各支部長から支部の現状について話題を提供していただいた。全体的に校友会構成人員の拡大化に伴う名簿の作成等における、時間的労力および経費の苦労談が顕著であった。支部によっては年会費を徴収し管理運営されている所もあるようであり、特に静岡県、茨城県の両支部では技術研修を実施し学術向上を活発に進めている支部もあり、これらの

支部を有する両校友会の存在を誇りに思うものである。各県共通した事項は校友に拘わらず、発注者と受注者の立場の違いから、あらゆる会議への同席が困難となっている実情が報告された。その他貴重な多くの意見を拝聴した。最後に工科系連絡会および工科系支部長会に出席された諸氏に感謝申し上げます。



技術移転、最近の研究のことなど

日本大学工学部助教授 工学博士
(総合教育 物理学教室) 藤 原 雅 美



1. ところで

大学の社会に果たすべき役割が、大きく変わろうとしている。心理の探究、人材の育成といったこと以外に、実社会への研究成果の還元が求められている。米国では1980年に制定されたバイ・ドール法を契機として、大学のもつ研究成果を産業界に移転することが活発化した。現在では250もの大学にリエゾンオフィス(学のシーズを発掘し、それを産のニーズに近づける機能をもった産学連携組織)が設置され、新産業創出の一翼を担っている。ここからふ化したベンチャービジネスは20万人以上の雇用を生み、4兆円規模の市場を形成して、米国経済再生の原動力になっているとさえ言われている。一方、わが国でも1998年に「大学等技術移転促進法」が成立し、日本大学国際産業技術・ビジネス育成センター(NUBIC)を含む4機関が文部通産両省から技術移転機関(TLO)として承認された。そして1999年2月、日本大学は真空理工株式会社との間で、私の考案した力学物性測定技術を有償供与する契約に調印した。これがTLOによる技術移転の国内第1号となり、日本経済新聞やNHKのドキュメンタリー番組にも取り上げられることに相成った。思わず反応に驚きつつも、貴重な経験をさせていただいたこれらはすべて私の研究室にいる大学院生や卒業研究生らが毎日夜遅くまで研究に取り組んでくれたお陰である。来年には全員(2名)が大学院に進学することになっている。

2. 最近やっていること

高温の材料では、一定応力の下にあっても、時間と共に変形が増していく、この現象をクリープという。材料のクリープ特性を調べるには、標準規格にあった数多くの試料を用意しなければならない。しかし、次世代の高温材料として注目されている金属間化合物などは、大きな試料を作るのが難しく、加工も困難である。そのため、特別な形状に加工することなく、少量で小さな試験片から

クリープ特性が評価できる新しい試験法の確立が望まれている。

「押込みクリープ試験法とその装置(特許出願)」は、小さな試験片に円錐形のダイヤモンド庄子を押し付け、押込み変位-荷重時間の関係:押込みクリープ曲線を解析することによって、材料の力学物性値を得ようとする試験方法である。図1に自作した押込みクリープ試験機の概要を示す、荷重は電磁力で与え、変位は差動トランスで測定する。これを用いて、庄子が高温の不活性ガス中で表面から $100\text{ }\mu\text{m}$ ぐらいの深さまで押し込まれるプロセスを連続的に測定する。この方法の利点として、(1) 少量の試料、小さな試験片から特性値が得られる。(2) 測定領域を選び、その場所のクリープ特性値が知れる。(3) 種々の荷重モードが可能である。(4) 負荷機構の応答性が良い。(5) 高温、高応力が容易に実現できる。(6) 真空、不活性ガス雰囲気の試験環境が容易に作れる等が挙げられる。これまでに、金属単結晶、固溶体合金、微細結晶粒超塑性材料について実験し、この方法から得られたクリープの活性化エネルギー

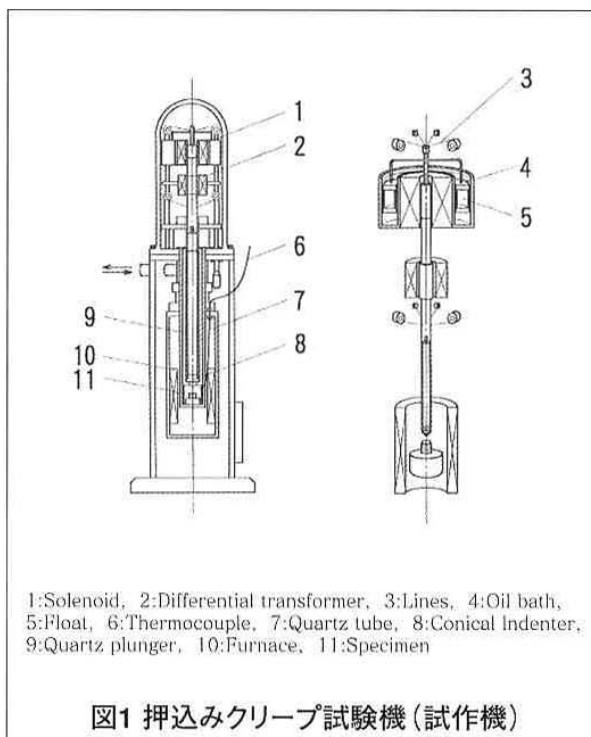


図1 押込みクリープ試験機(試作機)

と応力指数の値及び荷重急変時の瞬間変形挙動が、すでに報告されている引張クリープ試験の結果とよく一致することを確認した。この実験事実などによって、押込みクリープ試験法が、少量の試料、小さな試験片から材料のクリープ特性を評価するための簡単な測定手段として利用できることを証明した。今年度は、芝浦工大や岩手大の先生方と私の研究室に所属する大学院生らの協力を得て、分散強化合金と金属間化合物について実験を進める手はずになっている。

前述のように、本研究成果は真空理工株式会社に技術供与することが決まっている。現在、基本設計が完了し、実機テストの段階にある。今年度中には、中小企業総合事業団による研究成果実用化の為の支援を得て、製品

化される予定である。

3. プレイバック

毎年4月になると、新しい卒業研究生が配属されてくる。彼らは何処か自信なさげでひ弱な存在に見えるが、1年間のハードな研究生活によって見違えるほど変容していく。研究が生み出す教育的効果を実感する瞬間である。物事を深く考えるには、余分なものを捨て去る勇気と孤独感と暇な時間そして適切な助言が必要である。頭は鍛えるほど強くなる。彼らの努力が目に見える効果となったとき、大きな自信となってその存在が輝きはじめるることは経験的事実である。いつの日か、私の研究室から在野精神に溢れた起業家の現れることを夢見ている。(機械23回卒)

若葉マーク がんばり記

入社4年目を迎えて

西松建設株式会社 飯 島 慎 司



下げぶり等で出していくという原始的な(伝統的な?)作業に正直、ショックを受けたのを覚えています。

次の現場は古川ジャスコ、秋田八橋ショッピングセンター(S・C)とS・C工事が続きました。どこの会社(現場)でもそうかもしれません、S・Cの工事は突貫工事ばかりです。労働条件は厳しく、現場最盛期には、午前1:00まで仕事して、翌朝5:00出勤という生活が続く事もありました。学生時代、部活で鍛えたと思っていた精神力、体力も全く通用せず、いかに無力であり、自分に商品価値が無いか、身をもって痛感しました。

4つ目の現場では、先にも述べましたが、青森県三沢米軍基地において、米軍P・3Cという海軍の潜水艦追跡機(?)用の格納庫の工事をしております。建設業においての特権として、現場ごとにいろいろな場所に住み、多くの人と出会うことが出来るというのが揚げられると思いますが(これは欠点と思う人が大半ですが)、米軍基地の

私は平成7年建築学科を卒業、その後1年間研究生として在籍し、平成8年に西松建設(株)に入社致しました。

配属は東北支店で、現在三沢米軍基地内の格納庫の工事に携わっております。入社4年目ではありますが、まだまだ現場では、分からぬことが多い日々勉強です。

今更ながら、自分の時間が自由にある学生時代にもっと勉強しておけばと思うこともしばしばです。

しかし、この「勉強」は建築物の意匠、構造については勿論ですが、何も建築学に限りません。現場では、多くの知識、判断力、決断力が必要とされます。その様な中で、部活(体育会剣道部)に明け暮れただけの4年間を過ごした私は、さまざまな分野において、勉強不足を痛感させられました。常に、社会情勢、政治、経済等にも敏感であり情報を収集、処理し、活用する能力が今後ますます必要になってくると思います。

入社してから現在まで経験した現場は、4現場です。新入社員で配属された場所は、宮城県の古川合同庁舎新築工事で、工期は約1年半。SRC造の6階でした。大型現場であり、職員は14名。作業員は多い時で300人になりました。

現場において驚いたことの1つに(今でも時々感じます)、「墨出し」があります。この情報化社会、コンピュータ社会において、建築の位置(壁やドア等)を墨つぼ、

中の仕事は刺激を受けることばかりです。建物は日本と違うアメリカ仕様で、細かい納まりや仕上げ1つをとつてみても、日米の違いを感じることが出来ますし、特に仕事以外において色々な楽しみがあります。基地の中には、アメリカそのままであり、飲食店は勿論のこと、ゴルフ場、スキー場、映画館と何でもあり、米軍の友人やその家族とゴルフや映画を見る事は、習慣、文化の違いを感じつつ、日本とは違う雰囲気で楽しむ事が出来ます。

しかし、基地の中には設備工事を含め、三沢基地だけでも建設工事が20ヶ所以上発注されています。これらの予算が全て「防衛費」と言う名のもとの税金でまかなくな

れている事に対しては、複雑な思いを感じずにはいられません。もちろんこれには、米軍基地内に駐留している自衛隊(日本の)が使用することのない、私が今担当している米軍の施設も多数含まれるのです。

現在建設業に限らず、日本の社会は明日が見えない状態にある事は否めません。全ての分野において、日本国内だけでなく世界を相手に戦わなければならなくなるのは明白です。その中で不可欠なものは、眞の実力と、柔軟な発想であると思います。私は、仕事や趣味を通じ、また、人との出会いを大切にしながらそれを身につけて行きたいと考えています。

(建築43回卒)

校友会事務局の“事務所開き”開催

工学部の創立50周年記念事業として平成11年4月に竣工した50周年記念館に、工学部校友会事務局の入館が許可され、その移転に伴う“事務所開き”が平成11年10月24日(日)午前10時から同所で開催された。

この式典は、工学部校友会創立40周年記念事業の一環として企画されたもので、学部側から学部長はじめ学部関係者、校友会側から歴代会長、工科系校友会代表、工学部校友会新旧役員および支部代表並びに記念館設立金寄付者と、多くの方々のご参加をいただいた。

式典は、小野沢工学部長および佐藤校友会長の挨拶で始まり、歴代会長の功績に対する表彰と続いた。表彰者を代表して第2代会長関根昭一氏(電気2回卒)からは、校友会創設時のご苦労話などのご挨拶を賜った。次いで工学部長、事務局長および工学部校友会会长によるテープカットの後、新装になった事務所内を見学いただき、盛会裡に式典は終了した。

事務局は、校友会の顔であると同時に、学部と校友会員諸氏を繋ぐ窓口で、会員諸氏によって成り立っているものです。そのためにも会員諸氏が気軽に立ち寄れる所でなければならないと考えております。役員並びに事務局員一同は、このことを再認識すると共に、これを機により事務運営の簡素化と明るい開放的な事務局となるよう目指しております。今後とも、ご指導・ご指摘を宜しくお願いします。



校友会誌によせてー

日本大学工学部 広報担当 中村 玄正

日本大学工学部の平成12年度一般入学試験のうち、大学入試センター利用試験(C方式)は1月15日、16日に、地方試験(B方式)は2月3日に、本校試験は2月15日に工学部と経済学部で実施されました。平成9年度以降、工学部一般入学試験の志願者は1年ごとに平均14～15%の減少であり、まことに厳しい状況です。

このように工学部の受験をめぐる厳しい背景には、①平成4年度の205万人を最大とした後、18歳人口が年々5%平均で下がり続け、これに比例して受験者数も減少していること。②景気の低迷から、勉学経費の負担の軽い国公立に受験者が流れる傾向にあること。③同じく景気の低迷から、一人当たりが受験する校数が減少していること。④理工学部、生産工学部に対しての工学部の教育の特色が顯示されていないこと。⑤同僚他大学に比較しても群を抜く程PR等の積極策が打ち出されていないこと。等々が考えられます。

入学試験に関しては種々議論があるところですが、大学人は大学教育の本来の目的を常に考えておくべきでしょう。すなわち、学ぶ意欲の旺盛な学生が、将来の社会人目指してそれぞれの学問分野で基礎力を育むことを基本として考えるべきであります。そのために必要な学ぶ意欲と学ぶための基礎的能力の有無を適切に判断するための入学試験が基本です。

現実を直視し、如何に社会からの評価高い大学として存在するのか、今後のありかたを真剣に検討しなければなりません。そのためには、大学としていかなる教育をしていかなる学生を輩出し、第3者からの客観的に高い評価をいかに得るかがまず第1の大きな課題と考えます。同時に入学試験や広報戦略についても早急に対応策を検討、実践する必要があります。専門分野での社会的事情、構造的背景もありますが、適正な定員とともに、志願者が魅力的に感じるような学科のネーミングも検討する時期にあるものと考えます。工学部が郡山にあり、かつ情報工学科を平成5年度に設置していることを基軸とした学部の地域的特色、カリキュラム面での教育の特色を全面に出す広報戦略も大切であります。また、大学の魅力は長期にわたって在学生や卒業生が満足するよう

な教育内容、研究内容、教員陣の学内での接し方にあります。工学部の良さが在学生や卒業生を通じて出身高校の担任教諭や進路指導教諭さらには母校の生徒に口コミで広く伝播するようであれば、これに越したPRはありません。そうした面での教育の改善、充実やサービスの向上は焦眉の急であります。

工学部には、①50余年にわたる歴史と伝統があり、卒業生も4万人を超え、各専門分野で活躍していて、就職も有利です。②教員の学性教育は極めて熱心で、講義後の質問等を含め理解も大きく進みます。③教員の研究も盛んで国内外の学会での評価も高いです。④卒業研究や大学院の研究を通じての学生と教員との接触は密で人生の一時期、社会人になる直前教育として極めて貴重です。⑤教壇を離れてもクラブ活動その他を通じて学生と教職員とが人間的に接触する機会が多く充実した学園生活を送れます。⑥39万m²以上の校地に、テニスコート、野球場、サッカーコート、陸上競技場、弓道場、洋弓場、50m公認プール、体育館等スポーツ施設があります。⑦五十周年記念館「ハットNE」は学生ホールを中心として充実したAV教室等もあります。等々すばらしい教育・研究・生活環境に恵まれています。

工学部の良さを多くの方々にご理解いただく、そのために入試広報の一環として高校進路指導教員への進学説明会及びオープンキャンパスを開催して、広く出席頂く方策を検討中です。工学部の教育の現状や目指す方向、さらに次年度の入学試験制度について説明し、各学科の主任とも膝を交えてその特徴や教育状況について理解を求めています。また、工学部は県内外の多くの高校の生徒のツアー訪問やPTAその他の団体の見学を希望されることが多くなってきています。これは極めて貴重なことであり、今後ともこのような機会を通じて工学部の理解を深めてもらうと共により多くの高校その他の学校の訪問を大いに歓迎する方向で充実したいと考えます。

最後に、是非校友の皆様方を取り巻く多くの方々に工学部の良さをお話し頂いて、一人でも多くの意欲ある高校生が日本大学工学部に積極的に興味を持ち、工学部に進学していただくようお声をかけて下さるようお願い申しあげます。

校友短信

土木工学科

◇田口修一 (17回卒、(株)田口建設、岐阜県白川村)

(H.11.9.8受)

我村はユネスコの世界文化遺産に登録され、24日はフェスティバルが行われます。私も役員のため、母校を訪ねる会は出席出来ません。皆様に宜しくお伝えください。また、白川村に来る機会が有りましたら、是非我社に立寄って下さい。

建築学科

◇櫻井 公 (17回卒、(株)明匠一級建築士事務所、世田谷区)

(H.11.10.2受)

四谷で設計事務所を経営して23年になりました。大変ですが、何とか頑張っています。専門は「院内感染に配慮した病院設計」です。今「福祉マンション」という現場も工事中です。

◇川又(駒場)美恵子 (27回卒、(株)川又機設、ひたちなか市)

(H.11.9.16受)

昨年、母校を訪ねる会に出席しキャンパスを歩いてまいりました。懐かしいやら、また驚きやら、とても感激しました。女子学生も20年前からみると、かなり多いようで華やかさも少し加わったことでしょう。恩師の皆様、また同窓の皆様のご活躍を祈念しております。

機械工学科

◇石川猛彦 (8回卒、横浜市)

(H.11.10.4受)

現在、「厚木労働基準協会」の安全衛生指導員として、会の講習会講師及び会員事業所の災害防・安全管理の指導をしています。また、地域では瀬谷区生涯学習一環で40歳以上の人達の「シニアネットパソコン教室」でパソコン指導をボランティアしています。

◇小林秀明 (27回卒、ホンダエンジニアリング(株)、越谷市)

(H.11.9.29受)

私は、ホンダ技研の生産技術部門で車作りについての開発を行っています。3年前に、5年間のUS駐在から帰国しました。最近、就職状況が厳しいせいでしょうか、日大卒の新入社員はめっきり少なくなり有名国立大の出身が増えています。そして、学卒新入社員の5~6割は大学院終了です。このような状況ですが、日大精神を忘れず、日大卒も負けていないぞとの気持ちで頑張っています。

電気工学科

◇伊藤邦雄 (7回卒、八王子市)

(H.11.10.1受)

母校を訪ねる会のご案内ありがとうございました。卒業以来、いまだ学園を訪れたことなく、楽しみにしていましたが、都合悪く、欠席致します。1998年9月定年退職し、満1年が過ぎ尚健康。新しい職場を考えている所です。校友の皆様の、尚一層の御健康を祈念いたします。

◇佐々木弘之 (7回卒、米沢市)

(H.11.9.11受)

母校を訪ねる会のご案内ありがとうございました。どうしても都合がつかず、欠席させていただきます。次回には、ぜひ出席させていただきます。それまでは元気で頑張ります。

◇山崎隆司 (7回卒、エースライオン(株)草加市)

(H.11.10.6受)

現役で頑張っております。会社の行事と重なり、残念ですが出席できません。『母校を訪ねる会』の盛会を御祈念申し上げます。

工業化学科

◇杉原潤 (1回卒、大宮市)

(H.11.10.4受)

46年間のサラリーマン生活に終止符を打ち、大宮に帰りました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

◇宮崎敏明 (27回卒、(株)武内工務店、大分市)

(H.11.9.6受)

母校を訪ねる会、もう少し近ければ皆さんの顔を見に行きたいのですが…………

九州から郡山は遠く、都合がつきそうにありません。御盛会となりますよう、遠い空の下から願っています。同級会発起人の中に、川村卓君の名を見つけ懐かしく思いました。発起人の皆様、がんばって下さい。それでは、また。!

編集委員会からのお願い

校友会事務局へのお便りや、連絡などから、無断で掲載しました。限られた紙面のため、卒業年度の古い方からのお便りを優先させていただきました。ご了承下さい。学生時代の貴重な写真などをお持の方は、是非とも会報発行委員会にお貸しいただきたく、事務局までお寄せ下さることをお願い申し上げます。

CAMPUS

「工業化学科」から「物質化学工学科」へ

工業化学科主任 教授 加藤 昌 弘

卒業生の皆様にご報告申し上げることがございます。昭和22年以来続いてきた工業化学科の名称を、平成12年4月1日から「物質化学工学科」に変更することになりました。

これまでの看板名である工業化学科は化学工業との結びつきがとくに強いイメージでした。ところが、近年地球温暖化やダイオキシンなどといった多くの環境問題が広がりを見せており、それを無視した技術研究が成立しないことは明らかです。工学分野の一翼を担う本学科においてはなおさらのことでしょう。そのためには当然ながら化学分野のみばかりでなく、周辺分野も取り込んだ幅広い視点からの研究姿勢が必要となってきます。

そこでそうした新しい学問スタンスを打ち出そうということで物質化学工学科と看板名を変えるのです。物質化学工学科は、幾多の有為な人材を輩出した工業化学科の良き伝統を引き継いで、更なる発展を期す所存です。

卒業生の皆様にとって、この伝統ある学科名の変更に寂しく思われるでしょうが、何卒、社会の変化と学科の発展のためとご理解戴きたくお願いする次第です。

宍戸先生、タイ国教育功労賞を受賞

渡辺直隆

電気電子工学科の宍戸敏雄助教授(電気6回卒)は、私費を投じてSSD国際交流基金財団を設立し(福島県に登録)、主に東南アジア各国で活発に国際交流活動を行っています。

特に、タイ国には、昭和60年に研究生として留学したPREECHA RAKKURNG(プリーチャ)君が宍戸研究室に在籍したことを契機として、同君の出身県などを中心に国際交流・援助等を精力的に続けております。これらの長年にわたる教育交流における貢献が功労業績として認められ、今回のタイ国東北にあるナコンナチャシマ県から教育長賞が贈られました。授賞式は平成11年7月30日、タイ国ナコンナチャシマ県にて。

(電気17回卒)



磐梯セミナーhaus閉寮

磐梯山の東側斜面に『日本大学磐梯高原寮』が、昭和40年8月に第二工学部の厚生施設として建坪234坪の3階建てが完成した。

校友諸氏、日本大学関係者および家族にとっては、春の新緑を迎えると宝を求めて(山菜)磐梯山を散策し、夏には動植物の観察、秋には紅葉狩り、冬はスキー狂にとっては、最も経済的な宿泊施設等として四季を通じて多くの人々に思い出を残す事ができました。

特に土木工学科の卒業生は、2泊3日の測量合宿が脳裏に浮かぶことと思われます。実習中、兔や蛇の遭遇で無邪気な童心に戻って騒ぎ、また不運な者は、雨の中での測量でずぶ濡れ。

小林秀一先生(土木7回卒業)はじめ若い指導教員と学生との合宿生活で喜怒哀楽を味わった当時が思い出される。34年間、苦労を厭わず管理に、また学生の精神教育にご尽力いただいた吉野夫妻に感謝申しあげます。吉野氏の退職と同時に『磐梯セミナーhaus』通称『東磐梯寮』は閉寮となりました。

日本大学工学部校友会員各位

平成12年3月1日

日本大学工学部校友会長 佐藤光正

平成12年度通常総会通知

本会会則第15条により、日本大学工学部校友会平成12年度通常総会を下記の通り開催いたします。皆様には年度始めにあたりご多忙とは存じますが、先輩・後輩お互いにお誘い合わせの上、多数ご出席下さいますよう、ご通知申し上げます。

記

1. 日 時 平成12年4月22日（土）、午後1時00分より
2. 場 所 50周年記念館 ハットNE
3. 議 題 (1) 平成11年度会務報告および決算報告
(2) 平成12年度事業計画および予算審議・その他
4. 懇親会 総会終了後、引き続き情報棟8階（レストラン）において大学関係者を迎えて懇親会を開催

以上

第20回母校を訪ねる会

日 時 平成12年10月22日（日）
場 所 日本大学工学部 創立50周年記念館を予定
対 象 第8回卒業生（昭和35年3月卒業）
第18回卒業生（昭和45年3月卒業）
第28回卒業生（昭和55年3月卒業）



第19回・「母校を訪ねる会」懇親会風景

今回は、上記年度の卒業生が母校訪問の主たる対象となります。前回までと同様、卒業30年目にあたる卒業生をも対象としております。これは、従来開催された「母校を訪ねる会」の当該年度に、諸般の事情で止むを得ず参加できなかつた多くの校友からのご要望にお応えしたものです。

また、上記年度は主たる対象年度ですので、この年度以外の方々は参加出来ないということではありません。対象年度の当該に関わらず、是非とも多数ご来校下さり、大きく発展・成長した母校をご覧いただき、恩師や旧友との再会に懐かしい一時をお過ごし下さい。

日本大学工学部校友会役員

（平成11年度～平成13年度）

役職名	氏名	卒科回
会長	佐藤光正	機械9
副会長 (経理担当)	加藤木研	電気12
副会長 (事業担当)	手塚公敏	土木16
幹事長	渡澤正典	建築14
常任幹事 (事業担当)	村田吉晴	土木12
常任幹事 (経理担当)	伊藤義人	電気16

校友会報 第63号

発行所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-1165
電話番号 024-944-1327
FAX番号 024-944-1327

発行部数 44,000部
発行日 平成12年3月1日
発行代表者 校友会長 佐藤光正
編集責任者 編集委員長 石井和樹